

大人のためのおはなし会 2016

(手回しオルゴール演奏)

こんにちは、ホンノハシです。

今日のおはなし会のテーマは「ふたつ」

今、この手回しオルゴールで演奏したのは、二つの曲を合わせたものです。ベートーベンの「悲愴」とオズの魔法使いの「Over the rainbow」でした。二つが合わさって、独特のハーモニーが生まれますね。

また、ここにお茶の缶がありますが、こちらから見ると円に見えます。こちらから見ると長方形に見えます。見る角度が違くと、まったく違うものに見えるのです。

物語世界も、似たようなことがあります。

同じ物語なのに視点を変えると、解釈が変わってきたり、まったく違う土地で、同じようなお話が生まれたり、、、そんな「ふたつ」をテーマにお話をしながら、絵本の読み聞かせやストーリーテリングで物語を楽しんでいただきたいと思います。

まずはシェル・シルヴァスタインの描いた『The Giving Tree』です。この絵本を村上春樹が訳して、日本では『おおきな木』という題名で出版されたのがこちらですが、1976年に本田錦一郎の訳で出版されたのが最初です。

二つの大きな違いは、村上春樹訳は「ですます調」なのに対して、本田錦一郎訳は「である調」で体言止めが多く用いられています。そのため、小さい子に読んで聞かせるのなら、こちらの方が読みやすいのではと思います。また、少年がどんどん成長していくのですが、村上春樹はなるべく原著に忠実に訳したとあとがきで書いている通り、少年がどんどん成長していくにもかかわらず、原著では「boy」となっているので村上春樹訳では「少年」と書き、本田錦一郎訳では成長に合わせて「ちびっこ」「そのこ」「おとこ」と呼び方を変えています。村上春樹は題名は本田錦一郎訳がすでに親しまれ続けている中で混乱しないようにとの配慮から、「おおきな木」としているそうですが、もしそれがなかったら一体どんな題名をつけていたのでしょうか。タイトルのデザインは原著に近づけているようです。ほかにも微妙な訳に違いがあったり、訳以外にも違いがありますので、皆さんそれぞれにどちらが良いということがあるのではないのでしょうか。

新刊では出ていないこういった本を気軽に手に取れるというのが図書館の良さだと思いますし、どちらかという私はこちらが好きなので、今日は本田錦一郎訳を読みたいと思います。(読み聞かせ)

さて、次は昔話を紹介したいと思います。この神奈川県図書館があるあたりでは浦島太郎のお話が昔から伝えられていて、浦島太郎が竜宮城から帰ってきたときに、知っているものがみんな死んでしまった後だったため座って泣いたといわれている石がお寺にあたりもします。

この浦島太郎の伝説は神奈川県に限らず、全国各地に伝えられています。元々、昔話とは口から口へ、人から人へ語り継がれていったものなので、微妙に形を変えながら、そのと一に根付いた伝説として、今に生きています。飛騨の国、今の岐阜県に伝わる話に『みそ買い橋』というお話があります。「橋の上に行くときよいことが起きる」という夢のお告げを信じて、橋の上に行ったら、、、という話なのですが、岐阜だけに限らず、京都の五条大橋だの、東京の日本橋だのに舞台を変えて、日本各地に同じようなお話が伝え

られています。ところが日本だけに限らず、この話、アジアにもヨーロッパにも伝わっているそうです。そうすると、口から口へ伝えられただけでなく、同じような橋という舞台をもとに、同じような発想で偶然同じ物語が発祥したのかもしれませんが。橋には神さまが宿っているなんてことも聞いたことがありますから。イギリスの『行商人の夢』では夢を見た主人公がまずは奥さんに相談して、さんざん悩んでからありったけのお金を持ち、一張羅を着て街に出かけますが、日本の『みそ買い橋』ではすぐに商売のついでにその橋に向かうという違いがあったり、日本では杉の木が、イギリスでは榎の木になっているところなど、お国柄が出ています。

詳しい解説はこの『イギリスの昔話～親指トムの一生』のあとがきにありますので、読んでみてください。それでは、昔話が口から口へ伝えられたということで、『みそ買い橋』の素話、ストーリーテリングをいたします。(素話)

さて、昔話は大抵めでたしめでたしで終わりますが、それは主人公側に立った場合のこと。ももたろうを例にすると、鬼の側に立ってみればあんなにも悲惨で悲しい話はありません。そんな昔話に別のスポットライトを浴びせた物語を、ドナ・ジョー・ナポリという作家が描いています。たとえば『クレージージャック』ではジャックと豆の木の主人公がどうして豆の木に登ることにしたのか、その心情がとても細やかに書かれていたり、『ツェル』では「ラ・プンツェル」のお話の人間関係を深く掘り下げて描かれています。この『逃れの森の魔女』もあるグリム童話に出てくる魔女にスポットを当てた、美しく悲しい物語です。冒頭を少し読んでみます。(冒頭のみ朗読)

いかがでしょうか、何の昔話に続くのかは読んでのお楽しみとしたいと思います。そして、ぜひ、元になった昔話もお楽しみください。

さて、ここまでは一つのお話について、二通りの本をご紹介しましたが、一冊の中にふたつのせかいが描かれている絵本を紹介します。ウェバーの『じめんのうえとじめんのした』はかがく絵本で地面の上と普段見ることのできない地面の下の世界が描かれています。アン・ジョナスの『光の旅 かげの旅』は全てモノクロで絵が描かれているのですが、ひっくり返すと、まったく別の世界が展開します。

また、同じように光と影を題材にしたスージーリーの『かげ』という絵本では、空想と現実の世界を容易に行き来できる子供の世界を描いています。文字はありません。(めくる)

現実と空想の世界を簡単に行き来できる子どもの能力は、大人になるとほんのわずかになるか、失われてしまうそうですが、皆さんにはその力、残されているでしょうか。

同じスージーリーの作品『なみ』をお見せします。これも文字はありません。(めくる)

最後は、北欧民話『The Three Billy Goats Gruff』直訳すると『三匹の荒々しいオスやぎ』でしょうかこれは日本では『三びきのやぎのがらがらどん』と翻訳されて、マーシャブラウンの絵本でおなじみで、読み聞かせの定番ともいわれているので、子どもの絵本に関わっている方などはよくご存じだと思いますが、他にもいろいろな人が絵本を描いています。みそ買い橋のところで「橋の下には神が宿するという話もある」というお話をしましたが、ここでは橋の下にトロルという魔物が住み着いています。マーシャブラウンのトロルはなんだかよくわからない薄気味悪いもので、橋は深い谷の上にかかっている、ちょっと壊れそうなものです。こちらの本ではいかにも意地悪いきものというよりは人間。川はそれほど深く

なさそうで、橋もしっかりしていそうです。ガルドンの描くトロールはこんな感じ、橋と川がより具体的に書かれています。それでは、今日はポール・ガルドンの『ヤギのブッキラボー3きょうだい』を読みます。
(読み聞かせ)

今日は、二つをテーマに読み聞かせやストーリーテリングをお楽しみいただきました。今日ご紹介した本はプログラムに書いてありますし、貸し出しももちろんできますので、ぜひ、みなさんお家に持って帰ってじっくりと楽しんでください。(おわり)